

平成三年の『おくのほそ道』紀行

——永平寺を礼す——

一

放生津八幡から永平寺まで、平成三年の広島文教女子大学『おくのほそ道』行脚のテーマはこれである。

平成二年の行脚は、象潟から市振までであった。市振には宿とてなく、越後・越中の県境に数多い温泉地を宿泊地として求めたけれど、予約済とて空振りで結局芭蕉にはあまり縁のなさそうな魚津市郊外の新興温泉なる金太郎温泉までと足を伸ばしたのであるが、一応市振が最終目的地だったということ、平成三年の学生諸嬢には市振からの芭蕉主従の行動を追跡してもらおう。六月十三日市振宿を立った芭蕉主従は、越後・越中の国境を越して加賀藩の番所を過ぎて泊・入善を通り過ぎる。黒部川を越して申の下剋に滑河に着し宿す。十四日は滑河を立て浜街道を通って東石瀬野（富山への街道を通らないということである。）へ、神通川を

横山邦治

渡って放生津へ、更に庄川を渡って高岡へ着いて宿している。こういう様子なので、放生津まではあまり見るべきところもないということ、高岡から史跡探訪を始めることとし、加賀の国の山中温泉をメインイベントと決し、越前の国は永平寺に至るべしと衆議一決する。

越中・加賀・越前という三国の芭蕉の足跡を辿るという計画は、一寸欲張り過ぎではないかと一瞬思ったけれども、神社仏閣の探訪が主流となるので、道に迷うということもないであろうから、案外成功するかも知れないと思うことである。俱利伽羅峠越えが、体力的には一番大変であろうと思ひ、学生諸嬢にはその覚悟を促がしたことである。本当のところは、老化現象顕在化の私の体力の方が問題なのであるけれども。

九月六日（金曜）、広島駅七時三十分集合で八時五分発の新幹線で出発となっていたのであるが、珍しく列車の故障事故ということで時間帯がメチャクチャになってしまふ始末。結局一時間後の九時五分の新幹線に割り込んで京都まで、京都から特急雷鳥に乗り換え高岡に到着したのが二時半過ぎで、予定の行動が大幅に後れてしまふ。高岡駅前は何だか未整理の場末という感じで、道路もデコボコで工事中という有様である。駅前近くのよしの家旅館に手荷物を置いて出発。旅館のおかみさんが、フリー乗車券というのがあって、高岡周辺の観光には便利だと教えて下さる。『ぐるーっと万葉ふりーきつぷ』とある。高岡は国府のあったところで大伴家持が国司として赴任していたところとして著名なのである。

高岡市は庄川と小矢部川に挟まれた内陸部に位置していて、海岸線は新湊市で、高岡と新湊とは越の瀉を終点とする加越能鉄道万葉線で結ばれている。電車路線まで万葉線であるから、どうも芭蕉様は目でなさそうである。放生津八幡に行くには東新湊駅で下車、大きな工場の前にある無人駅で殺風景極まるころ、台風襲来の前兆のごとき大雨が降り始め、何もない無人駅に小一時間雨宿りである。

小雨になって町家の中を少し進むと小さな寺の並ぶ一角

に出て、その向うが放生津八幡宮である。大伴家持が天平年間に豊前国宇佐八幡宮から分霊を移祀したのが起源とか、建物自体は火災か何かで再建されたものらしくそれほど古いものではないが、なかなか風格のある社殿である。境内には『早稲の香や』の風化した芭蕉句碑がある、社殿横に大きな大伴家持の歌碑が建ち、裏手に海濱を背（浜は遠いが）に奈呉之浦の標柱がある。家持の歌『あゆの風いたく吹らし奈呉の海人の釣する小舟こぎ隠る見ゆ』（万葉集四〇一七）で想定するとき海辺の風趣はうかがえない。コンクリート壁の防波堤あり、その向ふに若い植樹林が広がっていて、海は遠去かっているのである。越ノ瀉あたりは埋立てが大規模に行なわれているようでもあり、歌枕の奈呉の浦も工場群の浦になるのであろう。和歌の浦も奈呉の浦も、至便なところは同じ運命をたどるといふのは経済大国の至上命令です。

東新湊駅まで逆行するのも興なしと、放生津の町並みを歩いて新町口駅に伺う、静かで落ち着いた町である。電車で中伏木駅まで逆行、如意の渡しを渡るためである。対岸を眺めると、夕陽が今まさに二上山に沈まんとしている。この景は、家持が眺め、芭蕉が眺めた景と変らないはずである。如意の渡しは、今小矢部川を渡る、この渡しを芭蕉はどのように渡ったのか、『おくのほそ道』には『黒部四十八が瀬とかや、数知らぬ川を渡りて、那古といふ浦に出

づ。”と記すのみだが、随行日記には「東石野瀬。(渡シ有。大川。)(四ツ半)ハウ生子。(渡有。甚大川也。半里計。)水見へ欲行、不往。」とある。東石野瀬で渡しに乗る、現在の東岩瀬であろう、大川は神通川である。そこから四里半、陸路で現在の富山新港の南を迂回すれば丁度そのぐらゐの距離で、浜街道を行けば放生津であつたらう。そこから高岡であるが、渡して対岸に行く。「甚大川也」を角川文庫では庄川と注する。「如意の渡」のパンフに「小矢部川は、明治三十三年の庄川改修工事前には、吉久地区で庄川と合流し、富山湾に注いでいたので、合流地点から下流を射水川と呼んでいました。この川の兩岸を結ぶための「渡し舟」の舟着場は河身の変遷によって度々移動しました。中世の義経記に見る「如意渡」は、この渡を指しています。」と見える。確かに今の如意の渡しはせいぜい五百米ばかり、「半里計」とは大違いである。ということは、芭蕉が渡つた渡しは、現在の庄川の東岸から小矢部川の西岸までの渡しであつたのであろう。そうとすれば確かに「半里計」と言える距離である。現在の如意の渡東岸の背後に広がる日本鋼管の広大な敷地などは、江戸の昔は射水川(大伴家持「朝床に聞けばはるけし射水川朝漕ぎしつうたう船人」(万葉集四一五〇))の水底であつたのである。芭蕉たちは放生津の港町の庄川河畔から対岸の国府の古跡の多い伏木に渡つたのであろう。角川文庫の注は、「明治三十三年まで存在し

た射水川」とすべきか、庄川の下流ではあるのであるけれど。ポンポンとのどかな渡し船で、気分は芭蕉主従もどきで、小矢部川を渡つたのであるが、江戸期の射水川という川はこんな川幅ではなかつたのである。舟渡りの時は、如意の渡というだけで喜んでしまつて、そんなことは考えもしなかつたのであるが、現実に見た川幅と「半里計」との乖離に気付くには歩いてみないと判らないなど思うことである。

伏木の船着場に着くと夕暮景、とにかく国庁跡をと、国庁跡に建つという勝興寺を探す。如意の渡の傍の岡の上が国庁であつたというのは、『義経記』の「如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事」という、後年歌舞伎十八番の「勧進帳」として大衆に親しまれることになる義経劇の原形が、ここの場に設定されていることによつて確保される必然性を思う。「勧進帳」は安宅関に設定されているけれど、それは「尤妄誕なり、抑このことは世にもてはやすことなれど、謡曲及び盛長私記に載せたる者にて、其実疑はし、(大日本地名辞書)とあるごとくで、『勧進帳』は近世的事実であつたのであり、国庁あつてその役人あり、如意の渡あつて渡守ありで、『義経記』では中世的事実が如意の渡の説話を生んだのであろう。

ともあれ国庁跡は如意の渡の伏木側、小矢部川西岸の岡の上である。JR伏木駅前を通り過ぎて町の人に道を尋ね

ながら坂道を登り始める。高台に登り切ったあたりに「越中国守館址」の石碑が見える、現在は伏木測候所である。パンフに「越中国庁跡の勝興寺前の坂道を百五十餘程下ると、伏木測候所の建つ高台がある。この測候所の建物は、明治四十二年伏木港の近くから現在地へ移築されたが当時そのままの姿で今も使用されている。「東館」の小字名の残るこの高台が、今の県知事公舎にあたる越中国守館の跡と推定され、当時は高台の真下まで射水川（現小矢部川）がとうとうと流れ、眼前に有磯海、雪をいたたく立山連峯を望む景勝の地」と見える。広大な土地というのではない、立地条件は確かに素敵だけれども、夕景とて立山連峯も有磯海も見渡せない。館跡からグラグラ坂を少し進むと豪壮な浄土真宗本願寺派雲龍山勝興寺、これもパンフに依れば、「戦国時代に越中一向一揆の中核として有力だった古刹は、二十四間もある本堂、経堂、總門、鐘楼など中世の豪壮な風格です。今も土疊や濠、空濠を残し、また往時の威勢を示す寺宝が多数所蔵されています。約三万三千㎡の寺域には奈良時代、越中国府の国庁があったと推定され、大伴家持は国守としてこの地に約五年間在任しました。」とある。本堂の横手に「越中国庁址」の自然石の石碑があるはずだけれど、夕闇迫って見ることが出来ない、巨大な土塀を見上げるのみである。万葉歴史館、気多神社などを経て有磯海の雨晴海岸、そして氷見の田子藤波神社へというのがこれ

からの予定コースであったが、この夕景では無理な相談というものである。芭蕉主従も氷見には「不往」というのであるから私どもも諦めるとして、「有磯海」の雨晴海岸ぐらいいは見てみたいというので、JRの伏木駅に引き返してみると丁度氷見行の列車。無人の雨晴駅で下車、雨は止んだけれど曇天で、観光地という気配は全くなくて民家がポツンポツンと建っている海岸線で暗闇状態。民家の間の小路を海岸の堤防に出て雨晴を見る、これもパンフの文言「国庁跡から北へ一km程のところ、二上山の山すそが雨晴海岸に落ちこむあたりを渋溪の崎という。男岩・女岩と名付けられた奇岩が、日本海の荒波にそびえ立っているが、家持が愛した渋溪の崎は現在の風景とはおよそ違っていただろう。江戸時代の古地図には、崎の名が示す通り陸地が今の海岸線より海に突き出し、氷見へ通ずる往来が海辺を通っている。」とあるが、松影と奇岩の影とが薄ぼんやりすかし見えるだけ、快晴であれば白雪をいたたく立山連峯も望見できて素晴らしい景色のようであるが、日本海の涯に輝くイカ漁船の漁火を賞美するのみである。

曇天の暗闇で初日は終る、よしの家旅館に帰って、俱利伽羅峠越えの平安を祈って就寝。

三

九月七日（土曜）、快晴である。

芭蕉は高岡で「ナゴ・二上山・イハセノ等ヲ見ル。高岡ニ申ノ上刻着宿。翁、氣色不勝。暑極甚。」とあるので、三時過ぎには宿に着いて身体を休めたようである。暑さに体調を崩したのもあろう。氷見まで足を伸ばさなかったのも、「一夜の宿賃すものあるまじと、いひおどされて」というだけのことではなかったのかも知れない。暑さと長途の旅による疲れが、あちこちに出始めていたのである。疲労ありながら翌十五日には高岡を発っている、旧国庁跡であり前田利長築城の城下町である高岡も、ともに語り合える俳諧の友を得なかったのであろう。当然のこと芭蕉閑連の俳諧は少ない、私どもは高岡市内観光。

駅前広場に大伴家持御像をまじり拝する、高岡はやはり万葉の故地なのである。そして日本三大仏という高岡大仏（文政・明治二度の木造大仏焼失後、昭和八年銅製大仏建立、総高十五米八十五）を拜し、旧北陸道に並ぶ豪壮な土蔵造りの町家を見学、そして高岡古城公園（加賀二代藩主前田利長が慶長十四年に築いた城跡を明治八年に公園として公開）の石垣と外濠に古城の梯を求め（美術館や博物館を見学する余裕はない）、高岡駅の地下道を通り越して瑞龍寺（曹洞宗の巨刹、高岡山瑞龍寺は、加賀三代藩主前田利常が義兄である先代前田利長の菩提寺として正保二年から約十四年かけて建立させたもので、敷地内に利長公や義父・織田信長公の分骨が納められています。総門・山門・仏殿・法堂を一直線に配列し周囲を回廊で囲んだ壮大な伽藍構成）に

参詣、重文として一部修築中、回廊をめぐるだけで疲れる、八丁道という参道を逆行すれば前田利長公の墓所である。八丁道沿いの灯籠が戦後の混乱期に盗まれたという、今は修理して昔日の梯を伝えようとしている。利長公の墓は神社形式の墳墓であるが、石塔は十一・七五米という巨大なもので、加賀百二十万石の財力の豊かさをうかがわせる。これで一応高岡市内を小さく一周したことになる。これをテクテク歩いたのだから、それだけで一同はゲンナリする。しかし芭蕉は「氣色不勝」と言いながら、翌十五日に「快晴。高岡ヲ立。殖生八幡^ヲ拜。源氏山・卯ノ花山也。クリカラヲ見テ、末ノ中刻・金沢^ニ着。」という健脚ぶり（馬もあつたであろう）である。芭蕉に少しでもあやからんものと、駅頭で駅弁を仕入れて石動駅までJRである。石動駅前には小さな町並みである。今は小矢部市の中心の町であるようだ。俱利伽羅峠の入口にある殖生八幡宮まででもバスはないものかと横着心で町の人に聞くと、国道なのにバス便はほとんどないという、所の人は歩くのが当り前という顔で、バスを待つより歩くのが早いと言われる。石動の町並みを通り過ぎると田園の街道風景、アスファルトの道を数キロ進むと三叉路あつて家並みの少しある道に入ると突き当りが参道入口、木曾義仲の馬上の巨像が吃立している。参道前の滾々と吹き出す手洗所の清水で喉をうるおしながら駅弁で腹ごしらへ、若い人は百数十段はありそ

うな石段を登って本殿に参拝している。埴生八幡宮は、木曾義仲が平家軍を倶利伽羅峠で火牛の奇襲で大勝した時、戦捷祈願したお宮というので著名で、今もその願文を蔵するというが、参詣人相手の社務所も見当らない神社である。

倶利伽羅越えの安全祈願をして門前店で道を尋ねると、店先の標識のある坂道を登っていけばいいとのこと、簡易舗装された坂道をしばらく登ると石坂という小集落に出る。八十過ぎくらいのお婆さんに峠越えはと聞くと、簡易舗装された道を行きなさいとのこと、昔の街道はと聞くと少し登って右折すればその街道だが、娘さんでは危ないから止めなさいと忠告される。とにかく登るつもりで来たのだからと山道に登りかかって、山草刈りの中年の奥さんに再度道を確認すると、最近の大雨で山崩れしたそうだから道がなくなっているかも知れませんがと恐ろしいことをいわれる。ここで鳩首協議、尻込みする雰囲気も生じたけれども、ここまで来て引き返すのも大変で、腰抜けと評されるのも業腹也と、決意新たに急坂を登り始める。この数年間に整備されたと思われる道である、故郷再発見か。「おくのほそ道」三百年記念か何かのイベントで修復された気配がある。旧北陸道倶利伽羅ふるさと歩道と呼ぶようである。ところが草刈りの奥さんの言のごとく、草が伸び放題なのは当然として、確かに大雨のせいで土砂が流出して石と石との間に深い溝がうがたれており、ピョンピョン飛び歩きし

ないと前に進めない、登り難いことこの上なしである。二十年前ぐらいのことになるが、中山道を行脚した時の美濃路の難路を思い出しながら、美濃路に比べると楽だと力付けながら登ることである。くねくねと数丁登ると、眼下に石動の町から向うが一望される棚場に出る、「中たるみの茶屋」と刻した石碑やら、

青松亭々

櫻花爛漫

と刻した詩(?) 碑や遊行上人の歌碑など並ぶ。峠にかかって一休みする茶屋跡なのであろうか。それにしても、この倶利伽羅越えには、それほど古色のない歌碑とか句碑が数多く見られる、故郷創成なのであろうか。森清松著『富山の文学碑』(北国新聞社刊)に、その石碑類の場所とか碑文は詳細である。

山の崩壊によって地肌がむき出しになっているところもあり、大雨の被害というのは相当なものであったのであろうが、幸いに旧北陸道そのものに被害は見受けられない。中だるみの茶屋跡からは少し平坦な登山道になるけれど、相変らずの悪路を上がり下りしながら進む。森の中の悪路を一里ばかりも登ったあたりに峠の茶屋跡、明治二十年ごろまで茶店があり、昭和三十三年まで人が住んでいたという、矢立山である。十返舎一九の狂歌碑などがある。その一山を越えると舗装された道にポカリと出る、ここからは楽だ

と歓声を挙げてみると、その舗装道の向うの方がパクリと土割れしているのが見える。大雨で道が流れたというのはこれかと思う。道案内用のマップや標識を見ると、源氏ヶ峰や地獄谷の方をぐるりを廻るようであるが、旧道ではないようである。要はこの舗装路が旧北陸道を切断していて、旧道と言えば再び山道に入っていかななくてはならないのである。旧道を行けば険しくとも直線で、舗装道を行けば大迂回である。ここで再び鳩首協議、ままよと山道に入ることにする。今まで以上の急坂で山草繁茂、土砂流出の状が激しい。草に覆われて見にくい石と石とを飛び歩きをしていると、この十数年来行脚のたびに愛用していたキャラバンシューズがキクツと音がした、悪い方の左足である。どうしたのかなとそのまま歩いていると、パカンパカンと靴底が割れて音を立て始めた。これは何とも歩き難いことである、あたりに人家も人影もないところとて靴交換が出来るはずもない。困却して鳶のつるでもと探すが適当な紐状のものが見当たらず、さてと思索していると矢野さんという学生が咄嗟にカメラの紐をどうぞと差し出してくれる。ありがたいとカメラの紐で靴先を固く縛って固定し、何とか登り始める。砂坂という砥波山の峠であるようだ。繁茂で小暗い木々の下をくぐり抜けるような急坂を登り切るとダラダラ坂、源平合戦の跡と称する公園めいた広場に出る。火牛の像やら石碑やら句碑やら大小様々あちらこちらと建

てられている、小矢部市長の松本正雄という人が万葉のふるさとづくりをされたそうで、峠道の歌碑などともに松本市長揮毫というのがやたらと多いことである。文化事業もここまですると一寸嫌味になつてくるが、全く文化なるものに没趣味の首長もおられることだから、それに比すれば可也とすべきであろうか。

山路の踏破は久しぶりにて疲れ激しく、飲物とて見当らないので、公園の中にある手洗い水を飲むことである。山の中なので水道水ではなく、谷水を引いてきているのでろうと一人合点して飲んだことです。この公園で大休止、芭蕉の句碑「義仲の寝覚の山か月悲し」が笑っているのではないかと思うことである。「足悲し」である。自動車利用の観光客がポツリポツリ姿を見せる、石動方面からではなく津幡方面からばかりで、この公園でUターンである。俱利伽羅峠はこれからのにと他人の疝気に気を病みながら、私どももそれ以上の石碑類を見学して歩く元気とてなく、峠を下り始める。舗装した坂道でしばらく下ると不動寺前が出る。参道前の茶店で休息、ここらまではバス便が一日数回あるというが、極めて稀でバス便を待つことは不可、不動寺参詣の気力も失せてとにかくJRくりから駅に向かう。山森という小集落から旧北陸道を通って竹橋に出で、JRつばた駅に出ると街道行脚らしくなるのであるが、その気力はもはや雲散霧消である。山森からくりから

駅のある坂戸の集落までも随分ある、途中で草刈りの人に駅への道を探ねると国道までは一本道と教えてくれる、広島から来て俱利伽羅を越えたと言うと、妙な趣味の団体だなという顔で見つめられる。今ごろ俱利伽羅峠を歩く者はいないという、富山県と石川県の県境なので政治経済での交流もあまりないのであろう。津幡川を渡って国道に出てほっとする、国道をまたしばらく歩いて右の山手に向かうとくりからの駅、小さなお店が駅前にあつて休息。この駅は特急など全て通過である、グリーンとスピードを出して通り過ぎる特急列車を何台か見送って、普通列車に乗り込む。普通列車でも金沢はすぐである。二十分あまりで金沢駅、悪戦苦闘してもはや夕景であつた。芭蕉主従は未の中刻（下刻を改めているので、下刻に近い中刻ではなかつたか、とすれば二時過ぎから三時ごろの到着としてよかろう）には金沢に着いている。馬を利用したかどうかは別として、私どもの午前中の高岡市内観光の時間を計算しても、芭蕉たちが効率的に移動していることになる。列車を待つなり、バスの時刻を尋ねたりと、省エネを考えてウロウロするよりも、黙々と歩くのが効率的なのかも知れないと思うことである。脚力という現代人の弱みを計算外としての話ではあるけれども。

ともあれ金沢市内のデパートでパツクリ靴代替用品を購入し、民宿いけ亀へ直行する。この民宿は、最も官僚的接

待法を採用しているところにて、民宿とは名ばかりで閉口頓着。空腹にて夜の街へ出かけざるを得ない有様でありました。

四

九月八日（日曜）、本日も快晴也である。前日の峠道の疲労感で全身綿のごとし、若き人たちの疲労回復は目ざましく、予定通りに願念寺・成学寺見学から兼六園観光にと出かけるが、私は足がパンパンになっているので今しばらく横になっておくこととする。ところが学生諸嬢の姿が見えなくなるとソワソワしてきて、思い立って野田山に向かう。高岡市で見た前田利長の墓が印象深く、前田家代々の大名墓を検分してみたくなったのである。小高い丘と言つていい野田山は、百七十五米あまりのこんもり茂った森を形成しており、その中腹に前田家代々の墓が数多く上に下にと秩序正しく並んでいる、自然の地形を生かしているの

で秩序正しくと言つても機械的ではない。散策するにも心落着く雰囲気である。質素な土盛り墓で鳥居がつつましく立っている。前田家は神道であつたのであろう。仏式の威圧的な大名墓とは趣きを異にし、天皇陵の巨大さに比して百万石大名の墓としてはつつしまやかな印象である。巨大な利長の墓にも感得された清楚な印象は、この前田家の神道式の墓に共通しているようである。そう言えば高岡の瑞

龍寺の伽藍も、日光の東照宮や松島の瑞岩寺に比すれば、豪宕とは評し得るけれども近世初頭の寺院建築の華麗さは全く見受けられなかったと思う。ここに前田家の家風がうかがえるのであろうか。かくのごときは、芭蕉様とは全く縁なきことではあるけれども、こうした前田家の家風によって治まっていた城下町金沢に到着した芭蕉は、十五日に京屋吉兵衛方に止宿、翌十六日に川原町の宮竹屋喜左衛門方に移ったりしているが、廿四日に金沢を出立するまで十日間も滞在している。思いもかけない一笑の三十六才という若さの死に遭遇し、廿二日の一笑追善会に出席するという目的があつたにしても、越後と越中を通過してしまつた芭蕉の行動とは、何かそこに異なるものがあるようである。文化的風土の違いがあつて、芭蕉の風雅を受け容れる土地の人の雰囲気があつたのであろうか。百万石城下町の空気が、前田家の治政の在り様が、芭蕉をしてこの長期滞留を可能ならしめたのかも知れなかつた。百万石城下町の文化的風土として、結局はその経済力に由来するのではあろうけれども。

その金沢に私どもは短期滞在、昨夕いけ龜近くの雨宝院、成学寺、「あかく」との句碑など見廻つたけれど、それはそこにあることを確認するだけ、兼六園見学から帰つた学生諸嬢とタクシーで金石町に向かう。随行日記に「廿三日 快晴。翁ハ雲口主^ニテ宮ノ越^ニ遊。」とあるところであ

る。雲口は町人という、宮の越は加賀百万石という大藩の海の窓口で富裕な町人が住んでいたところであらうから、雲口も当然そうした町人の一人であつたらう。そこで芭蕉は「小鯛さす柳すゞしや海士が妻」を発句とする表六句の俳諧を催しているが、その発句の句碑が大龍寺境内にあるという。その大龍寺は改築中にて工車用車輛がゴチャゴチャで、不風流なことである。相当大構えの寺院で、昔日の宮の越の繁栄を偲ぶことができるけれども、本堂左前の大きな松の根元にある句碑を拝するに止まる。幕末の豪商銭屋五兵衛の立派な墓が、その句碑に対峙する。牢死した五兵衛であるが、死後はそれなりの処遇があつたのであろう。加賀藩による財産没収、家名断続という苛酷な処置があつたけれども、大龍寺の墓を残すだけのものはあつたのである。大龍寺を後にしてバス停に出る途中、右手に銭五遺品館という建物があり、墓の印象もあつたこととて入館してみることとする。パンフによれば「昭和四十三年七月二十一日設立。旧金石町警察署の建物を銭五顕彰会が改装し、新たに銭屋五兵衛とその家族の遺品・遺墨展示場とする。多くの人達に銭五の偉徳を知っていたゞきたいという地元の長年の念願によって建設されたものである。」というものの、一代の豪商を顕賞する施設としては少し貧弱というべきであらうか。財産没収という悲運に遭っていることとて、銭屋に酒田の本間家のような自力による顕賞を要求するのは

不可能ではあろうけれども。

受付におられる御老人、錢屋十一代目の当主である五兵衛氏とかで、展示物一巡の私ども遠来の珍客を歓迎して錢屋五兵衛（七代目）の一代記を講釈して下さる。錢五が、河北瀉事件（瀉の干拓事業の時投毒して死者が出たと疑われた冤罪事件）で入牢、獄死したことを嘆き、その無実であったことが証されていると力説される、加賀藩の政争と幕府の圧力とによって捏造された事件というにあつたようである。無念さを滲ませた迫真的講釈は人の心を打つものがあるけれども、限りなく続きそうなお話しには、当方とて時間制限ある日程にしばらくいられて身とて十二分に付き合いかねて、途中で辞して足早にバス停に向う。金沢駅から次の目的地小松までJRである。

小松まで金沢から三十kmあまり、野々市町・松任市・美川町・寺井町を経て安宅関跡のある小松市である。芭蕉たちは、七月廿四日金沢を立つに際し、「小春・牧童・乙州・町ハツレ迄送^ル。曇口・一泉・徳子等、野々市迄送^ル。餅・酒等持参。」という盛大な見送りをされて「申ノ上尅」には小松に着いている。小松はすぐ出立するつもりであつたようであるが、「所衆聞而以北枝留。」というところで、廿七日まで滞在することとなり、その廿七日に「八幡へノ奉納ノ句有。真盛が句也。」ということがある。廿七日に小松を立つけれども「斧ト・志格等来留^トイヘ乍、立。」とい

うのであるから、小松の有志によって滞留を望まれているようである、越後・越中での扱いは違ふ雰囲気を感じる、当代の文化的土壌の差であつたのであろうか。

JR小松駅に降り立つ、地方都市の小じんまりと豊かに落ち着いた街並である。駅前大通りを直進すると正面突き当りに大きく立派な寺院が見える、目指す建聖寺かと喜んで門標を見ると本覚寺という浄土真宗のお寺である。北陸地方は一向宗が盛んであるから、こうした立派なお寺が多いのであろう、右折して寺町通りをしばらく進むと一般の民家と大差ないたたずまいのお寺が、永龍山建聖寺である、小さな山門の側に「はせを留杖の地」という標柱があり、門内に入ってガラス戸越しにうかがうと、北枝作という芭蕉像が拝観できるようになっている。庭先に句碑も建っているが、お寺というより大きな住宅という感じで、廿四日の「近江やト云宿ス。」から廿五日に北枝に滞留を望まれて「立忝寺へ移。」というお寺と云えば、一層の親しみを感じる。もつともこの建聖寺というのは、随行日記の「立忝寺」という表記を音通による当字と推定してのものようであるから、芭蕉が本当にこのお寺に宿したかどうかは確定出来ないようである、証拠があるわけではないだろう。ただ建聖寺は曹洞宗であるから、永平寺を「礼」した芭蕉にとつて身近に感じられる寺であつたかも知れない。

建聖寺から逆行して本折商店街の広い街道を進むと、右手に本折日吉神社がある。芭蕉が廿五日に、多田八幡へ詣テ、真盛が甲冑・木曾願書ヲ拜。"した後で、終、山王神主藤井伊豆宅へ行、有会。"という神社で、今流に十分手入れをしたお宮さんである。この神社については『おくのほそ道』に全く触れられていない、曾良の俳諧書留に「小奈山王会　しほらしき名や小奈吹萩薄」の句を著録せしめた俳諧を巻いたことにより、「実盛の甲、錦の切れ」が鮮明な印象を芭蕉に残したのであつたらう。

本折商店街を通り過ぎて少し商店の町としては淋しいかぶと商店街を抜けるまで、重い足を引きずりながら十数分進むとこんもりとした繁みの中に鎮座します多太八幡、上本折町七二である。人一人いない境内で小ぶりの本殿を拝し、さて実盛の甲はと宝物殿を探すと、右手の鉄筋の建物の前に「本日閉館」と立札がある。がっかりして庭前に腰をおろしていると、境内の草取り奉仕しておられる御老人がおられて、ここの宝物館は見せていただけなものか、広島から遠路はるばる来たのですがと尋ねると、神主さんに相談しましょうと本宅の方に入って行かれる。しばらくして見学させてあげましょうと出てこられた神主さんを見ると、先ほどの御老人、恐縮しながら宝物館を見学させていただく。

『集古十種』の画と一緒に展示してある甲は、『集古十

種』に精写されているほつれなどは全く見受けず、明治三十三年国宝指定の時に補修されたものとのこと、補修したかと思われる部分が褪色しているのは、他所で見かける甲冑の例に曳れないようである。大袖一雙も展示されているが、その華麗さは「げにも平士のものにあらず」という威厳を十分に備えているものである。錦の切れも展示してあるが、昔はずい分大きな直垂の形状を有していたのだが、前田の殿様など御参拝なさる時に御所望によって切り取って献上したとのこと、もちろんその対価はあつて、近世時の書画が相当に展示されているが、多く前田公の奉納によると話される。殿様の物好きである。前田公の宝物の中にこの錦切が大切に保存されているのかも知れない。ともあれこれらの宝物は立派な展示室のガラスケースの中に収蔵されているので、「甲の下のきりぎりす」といった風流はないようであるが、神主さんの善意で拝観できたことを感謝するのみである。

木立の陰の涼しさは疲れの良薬、その涼しさを満喫して再び小松駅に引き返し、駅前から栗津温泉經由のバスで那谷寺に向う。那谷寺の大きな標柱のあるバス停前のお店に荷物を置かせてもらって那谷寺に向って歩く、もう拝観門限が過ぎていますよという声を背に、ここまで来れば門前払いになっても山門越しでもいいから拝観しようということである。拝観券売場は閉鎖で、山門入口も閉ぢられてい

る、山門越しでもいいから、〃石山の石より白し〃という岩山を見たいと思うけれど、境内をうかがうことも出来ない。とにかくと従業員の出退しようとしておられる山門脇の勝手口から、広島から遠路はるばる也とどこかで申し上げた同じ口上で拝観を嘆願する、何だか強引に勝手口から入り込んで日没後の夕景の中で境内を一巡させてもらう。

『おくのほそ道』では、山中温泉に向かう途次、左の山際に観音堂あり〃という軽いタッチで那谷寺を紹介するが、随行日記によれば八月五日に北枝と再び小松に行く途中で那谷寺を詣している、〃昼時分、翁・北枝、那谷へ趣。明日、於小恠、生駒万子爲出會也。〃とある。那谷寺は高野山真言宗別格本山であるから、元禄のころとて路傍の小堂というのではなかったのである、那谷寺のパンフによれば、往時は寺院二百五十ヶ坊に及ぶ隆盛を極めました、延元三年南北朝の争い、文明六年一向一揆により坊舎が焼きつくされました。しかし寛永年間、加賀藩主前田利常公がその荒廃を嘆き、後水尾天皇の勅命を仰ぎ、岩窟内本殿・拝殿・菊門・三重塔・護摩堂・金楼・書院等を再建、境内の一大庭園を復興され今日の御祈願所とされました。〃というのであるから、芭蕉訪問時には現在の堂塔のたたずまいが拝されたのであり、〃山際に観音堂あり〃ぐらいのことではなかったと思われる。入口あたりの山門、普門閣、金堂華王殿など華麗な建築物は新しいものようであるが、

重文指定の本殿を始めとする多くの堂塔は寛永年間の建築のようであるから、芭蕉が拝観し得た建造物なのである。

〃山際に観音堂あり〃は大悲閣と名付けられた拝殿、岩窟内の本殿を指したのであろうか、本殿の厨子には那谷寺御本尊十一面千手観世音菩薩が安置されていると言うから。私どもはゆるゆると堂塔を見廻る時間的余裕はない、古杉の林立する参道を直進して奇岩遊仙境に向う。堂塔の扉を閉めて帰るのであろうお坊さんらとすれ違いながら進むと池のほとりにでる。池の向う側にパンフに、〃観音浄土補陀落山を思わせるこの天然公園は、現世のパラダイスとして大切にされてきました。太古の噴火の跡と伝えられ、長い年月の間、波に洗われ今日の奇岩が形成されました。〃とある巨大な岩石が吃立する。ところどころに人工的洞穴がうがたれ、人が歩けるぐらいの阻道も岩をうがって造られており、洞中には観音など石仏が安置されているように見受けられる。修行の場としての存在でもあったのであろうか。

岩肌は白色というのではない、夕景のせいもあつたのか少し薄茶を含んだ灰白色である。大津の石山寺の白岩群に比すれば、白色という印象はあまりない岩塊である。那谷寺での芭蕉の発句、〃石山の石より白し秋の風〃の解には諸説あること周知のことであるが、今ここでは石山寺の石よりも那谷寺の石が白いということはないという事実を認識すればよいのである。強請して自生山那谷寺境内に入り、

奇岩遊化境に直行したのは、その岩塊を実見したかったからである。庭園とか堂塔の様子には時の流れがあるに違いないのであるが、この奇岩遊仙境の岩肌は、芭蕉が実見したのと全く同一のもののはずであった。芭蕉は石山寺の石の白さは実感しているはずで、その実感の上でこの那谷寺の石の灰白色を見たのである。そのことあってあの句が吟じられたということ、私としてはここで再認識しておけばよいのである。

岩肌に接して建てられた本殿は石段下から望見するのみ、歩道を右折して庭内を進むと、「石山の」の芭蕉句碑の前に出る、一同欣喜雀躍でカメラ班の活躍となる、夕景で果して果して影像化できるかどうかは疑問だと思っただけれど、今ごろのカメラの性能は抜群で失敗ということはないようである。三重塔や鐘楼など重文の建築物があるのであるが、急速に暮れゆく気配に落着いて見学する余裕もなく退散である、門衛さんに深謝深謝でした。

バス停で山中温泉行きのバスなしと判り、タクシーで温泉行である、恐らく芭蕉主従が辿ったであろう山道である。「おくのほそ道」の「山中の温泉に行ほど、白根が嶽跡にみなして」とある文章を想起して、運転手さんに白山はこのあたりで見えますかと尋ねると、このあたりではもう見えませんよという。谷あいに入ると小山にさえぎられて見えないようである。夕闇せまるころとて、今の時刻では見

えないこと当然である。「跡にみなして」の実態については論のあるところであるが、その実態を実見するに至らない。とにかく今夜の宿である山中グランドホテルに直行、道明が淵も医王寺も菊の湯も今や念頭から去っている、長年履きなれた靴と訣別したせいなのか、足指に豆が出来てしまったのである。とにかく休息あるのみ。行脚に不似合な豪華なホテルも、湯元とは離れた山の上にあるので一寸散策で道明が淵という気分にならないのである。

五

九月九日（月曜）、本日も晴れである。

芭蕉は山中温泉で曾良と別行動となる、曾良は体調を崩して一足先に出発して、曾良の伯父という秀精法師のいる長島の大智院で養生することとしたのである。山中温泉からの曾良の足取りは随行日記で明らかであるが、芭蕉の行脚行程は「おくのほそ道」の記述に拠らなくてはならない。虚構も時に見受けられる「おくのほそ道」であるから、正確な行程は今少し不明確と言う外はないけれど、随行日記を見ると何かと芭蕉の身を案じての手配をしていることが判るので、随行日記の行程と大きく違いがあるわけではないであろう。山中温泉からの曾良の行程を辿ってみると、八月五日に山中温泉を発して大聖寺の全昌寺という寺に泊まり、六日には菅生石部神社に参拝、七日に吉崎から汐越

を経て北瀉・金津と通って丸岡で宿泊、八日には福井・武生と経申して今庄に着く、九日には末の刻に敦賀に着いている。「おくのほそ道」の記述をたどれば、全昌寺で一夜を過して越前と加賀の境の吉崎で汐越の松を尋ね、松岡の天竜寺から永平寺に礼して福井の城下町に等裁を尋ね滞留、そこから等裁と同道して北陸道を辿って湯尾峠を越え、今庄の宿場を経て敦賀の津に着いている、十四日の夕暮れ時と記す、曾良より五日後である。全昌寺へは一日後に着いているというから、松岡の天龍寺と永平寺の寄り道が芭蕉の行脚速度を遅滞させたのでもあろうか。

平成の私どもは、山中温泉にある芭蕉遺跡見学は省略で、乗合バスに乗り込んで大聖寺に向う、今の加賀市の中心部である。白根が嶽を後にしてバスは進むのであるが、曇り空で何も見えない、台風接近中の曇天である。昨日は動橋川添いに南に向ったのであるが、今日は大聖寺川沿いに北に下るのである。国道三六四号線である。山代温泉の町中を通り過ぎて北陸本線の大聖寺駅前に着く。この道は芭蕉たちも辿った街道であろうか、バスの窓越しの風景は谷間の薄明りから抜け出して田園の広がる平野部に出れば、重厚な感じの民家もあちこちに見られて、芭蕉の見た風景とは大分趣きを異にするだろうなあとと思うことである。

大聖寺駅前から徒歩で十数分、町中を抜けて少しは田島も残る道を進むと全昌寺である。熊谷山全昌寺は、大聖

寺城主山口玄藩頭宗永公の菩提寺で、曹洞宗の寺であるが、慶応三年に完成したという五百羅漢像と芭蕉が宿泊したというので観光化している小さな寺院である。境内に入つて左側のお庭めいた茂みの中に芭蕉塚があり、曾良の句碑もある。金沢あたりから秋の句が残されるのであるが、全昌寺で残された句も、秋である。八月八日か九日、陽暦で申せば九月二十二、三日、朝夕は秋風が身に染みたのか、酷暑の酒田市から越後を越えた芭蕉にとつて、土地の人の歓待もあつて心地よい秋風であつたのであろうか。曾良の句にある「うらの山」は、秋風の颯々たるを聞くごとき山があるわけではないようである。曹洞宗に属すると言つても、山かげに立地するという寺院というわけではない、衆寮に臥せば、あけぼのの空近う、読経声澄むままに、鐘板鳴りて食堂に入る。」とあつて、出立するにあたり、若き僧が短冊を求めたというのであるから、芭蕉訪問の当時は修行の場にして相当の威容を誇っていたのであろうが、今はそうした雰囲気はうかがえない。ここの記述は、今の永平寺にあてはめればピッタリとはまる感さえあるようである。

簡単に大聖寺駅前で昼食をすませ、バスで吉崎に向う。国道三〇五号線である、大聖寺川添いに加賀・越前海岸に向うのである。曾良の随行日記によると、この間を「立花十町程過テ茶や有。ハヅレ右吉崎へ半道計、一村分テ、加

賀・越前領有。カヅノ方ハ舟不出。越前領^ニテ舟カリ、向ヘ渡ル。水、五・六丁向、越前也。(海^βニリ斗^ニ三國見ユル)下^{リニハ}手形ナクテハ吉崎ヘ不^レ越。コレヨリ塩越、半道斗又、此村ハツレ迄帰テ、北潟^ニ云所ヘ出。壱リ斗也。北潟^ニ渡。越テ壱リ余、金津^ニ至ル。三國ヘニリ余。申ノ下刻、森岡ニ着。”という經由である。一向宗の聖地である吉崎御坊に立ち寄った気配はない、汐越の松は見学したようであるから、芭蕉もほぼ同一の道を経由したとしてよいであろう。平成の私どもは、バスで一瀉千里、吉崎御坊前(北陸鉄道バス停)到着である。

吉崎御坊の吉崎寺は、嫁おどし肉付面の説話で著名なお寺、鉄筋コンクリート二階建の本堂と宝物館、傍にある大きな松が古寺であることを示すだけの完全に観光化された寺である。信仰の違いもあって芭蕉主従は一顧だにしなかつたかも知れないが、安芸門徒の多い私どもの御一行様は、何の抵抗感もなく御参詣である。吉崎寺の縁起は、本願寺の蓮如上人(親鸞上人から八代目)が、文明三年(一四七二)越前国(福井県)と加賀国(石川県)の境にある吉崎へ来られて、この地方の名主・大家彦左衛門吉久の援助を受けて吉崎道場を作り、浄土真宗の教えを広められました。”とあるもの、伝説の肉付面は宝物館に鳴物入りで展示してある、鬼面というより夜又面である。本堂の二階で和尚さんの説法を受ける、裏側の窓から田畑と民家が櫛比するところ

ろを指し示しながら、あのあたりが越前と加賀の国境と説明される。北潟湖口に位置する吉崎は、古く交易の港として多くの舟の出入りがあったところのようで、一向宗の布教にとつては絶好の場であったのであろう。

慶聞坊の法名をいただいた吉久は、千歳山一万坪を寄進したというが、その山腹に東西の本願寺別院が建立されており、東別院の側に願慶寺という寺がある。その願慶寺口も「正真嫁威肉附面」があり、縁起が語られる、吉崎寺のパンフには偽物であることが断わられている代物である。これは能面めいた鬼面である、男性的と申しましようか。このお寺の説法は、縁起をふくめて講談調で面白いものである、さてどちらが本物であるか判定に苦しむところである。東西両別院のたたずまいは、一般に一向宗の別院というのは巨大な建造物が多いのであるが、由緒ある聖地の別院としては質朴な造作で、観光客相手の設備もない、巨大さを感じさせないところが特長とも言えようか。

芭蕉が吉崎に立寄ったのは、汐越の松を検分しようという目的があつたからである。汐越の松の古歌が、蓮如上人の作だとか西行の作だとか説は分かれるが、芭蕉にとつては西行法師の作であり、だからこそ少しばかり寄り道したのである。象潟での「花の上漕ぐとよまれし桜の老い木、西行法師の記念をのこす」の引歌とて伝西行の歌なのである、芭蕉にとって伝西行の歌枕こそしたわしいのである。

私どもにとつても汐越の松の現況は見聞しなくてはならないこととて、ゴルフ場と化しているとは伝聞しながらも、ともあれと吉崎御坊前から北潟湖に沿って歩き始める。湖のくびれに架橋の開田橋を渡るころ、強風が吹き始める、台風之余波である。一キロメートルあまり坂道を上つていくと、道の西側に柵がめぐらしてあつて外車をはじめ高級乗用車がずらりと駐車しているところに出る、ゴルフ客の車である。芦原ゴルフクラブの事務所、クラブハウスと申すのでしようか、その建物の前庭に汐越の松の記念碑が建っている。クラブハウスに申し出て汐越の松の遺跡を見物したき旨を申告すべきかと考えたけれど、遺跡荒しの元凶に頭を下げるのはイヤ也、現代の特権階級たるゴルフ族の球にぶつかるのをイヤ也とブツブツ言いながら外柵を廻っていると、一部の柵が開いて中に入れる。盗人気分で行くと、ここらあたりの農家の主婦とも思える人が掃除をしておられる。汐越の松があるのはどのあたりですかと尋ねると、ゴルフの打ちっぱなしのある広い谷間の松林のはるか向だという、海ぎわの松が見えるか見えないかの有様である。松は枯れて切り倒され、倒木が少し放置してあるだけらしいですよとのこと、そこまで行くのはゴルフの玉に当たる危険性があるから無理ではないかと言われる。球に当たるもイヤ也であるが、歌枕の佳景をクローズして一般庶民を近付かせないゴルフ場なるものに怒りを感じな

がら、何も得るところなしで引き返さざるを得ない無力さに一層腹立たしくなってくる。高級乗用車の列が、ヤーサマの外車のごとくに憎たらしく見えてくる、ヤダナーと学生諸嬢と話しながら、日本の文化行政の貧困であることよと、今更のごとく空しい嘆息をつくことである。三百年前の芭蕉たちは、汐越の松の傍に佇んで、遙かなる日本海の広がりを見望しながら昔日の悌を偲び、心満ち足りたことであろうと思う、文明開化の私どもは、その有様を脳裏に想い描くことしか出来ないのである。汐越の松が、どのような場所にどのようにあつたのか、そのあたりの海の広がりなどはどんなであつたのか、あたりに人家が見えたのか、人影があつたのか、今少しの手がかりを得ようとする直前でゴルフ場がシャットアウトしてしまっているのである。今は諦めてトボトボと高級乗用車が疾駆する道を引き返すしか方法はない。ままよ芭蕉たちもこの道を歩いたのだと思ひ直し、完全舗装の道路を踏みしめたことである。

汐越から福井まで、曾良の随行日記によると、コレヨリ汐越、半道斗。又、此村ハツレ迄帰テ、北潟云所へ出。壱リ斗也」とまざる。曾良は汐越から北潟湖の北岸を今の北潟東を経て北潟西に至つたのであろう、一里と言えはそれぐらいの距離である。そして、北潟を渡り越テ壱リ余、金津至ル。三国へ二リ余。申ノ下刻、森岡着」とある、今は橋が架っているけれど、北潟西あたりから対岸まで渡

し舟で渡り、赤尾という部落あたりから金津に出て、午後四時間ごろ吉田郡森田町（角川文庫注、今は福井市）に至っている。曾良は次の日の九日に福井を経て一挙に今庄の宿に到着しているが、芭蕉は松岡の天龍寺と永平寺を訪れて福井に至っている。ただ汐越から金津までの道程は同じことではたはずである。ただ汐越から金津までの道程は同じことであつたらう、平成の私どものキャラバン隊は、再び吉崎御坊前に集合して芦原温泉経由で東尋坊行のバスに乗る。平成のギャルたちにとっては、東尋坊の景色は見落せないものである、そこは芭蕉さまと違ふところなのです。

台風之余波の強風が吹き荒れる東尋坊の奇景を眺めて、その夜は三国の町の民宿たまやに宿る。海岸沿いの民宿で、新鮮な魚が美味である。三国小女郎を偲んで夜の三国の町を歩いてみるが、何とも閑しい町である。

六

九月十日（火曜）、台風一過の快晴である。

『おくのほそ道』の行脚とは縁なきことと思ひながら、三国の町並み見学、瀧谷寺（真言宗智山派の名刹、六百余年の歴史がある）龍翔館（三国町郷土資料館、明治十二年建立の龍翔小学校を模した洋風建築）を見る。そして三国駅から永平寺行の特急バスに乗って丸岡まで、日本最古の天守閣を有する丸岡城を見学するためである。

芭蕉は汐越から松岡（『おくのほそ道』では丸岡とあるが、誤記と諸注にある。丸岡には「古き因」あるという「長老」なる大夢和尚が住職をしている天龍寺は存在しない。曾良も森田とあるべきを森岡と誤記しているらしいので、丸岡・松岡・森田など混同し易い名前とて錯覚したか）の天龍寺に寄っている。恐らく金津からは丸岡の城下町を経由し、九頭龍川の河岸に沿って街並を形成する松岡の城下へ、どこかで九頭龍川を渡って到着したはずである。私どもはバスで通り過ぎるのであるが、北陸本線を道路が横断する池口の集落あたりからは、芭蕉と北枝とが歩んだであろう道と重なり合っているかも知れないのである。

福井平野は広大である、日野、足羽の二大支流を合せての幅広い流域を有する九頭龍川の流に沿って広がる越前の穀倉地帯である。金津あたりから丸岡までは、西側に遙か白山連山の高峯を望みながら行儀よく耕やされた田園地帯が見渡せる。ところどころに森あり林あり、祠あり寺ありという豊かな田園地帯である、この心なごむ風物を楽しみながら、芭蕉たちはこの道を辿ったはずである。

丸岡は北陸道の要衝というので、柴田勝家が越前に封じられた時、猶子勝豊に天正三年築城せしめたところ、三層の天守閣が今に存するのである。平山城であるけれど、広い福井平野の中では遠くから望見し得る高層建築であり、石造りの鯨は雄大に映ずる。芭蕉が来往したであろう元禄

二年当時は、鬼作左の異名ある本田作左衛門重次の息成重四万石の居城であった。福井大地震（昭和二十三年）で倒壊したけれど、材料をそのまま使って昔日のごとくに再建修復されており、現存する天守閣として最も古い様式を伝えたものとして著名である。

元禄の芭蕉は平成のかくのごとき評価は知らない、ただ傍見して通り過ぎただけに相違ない。丸岡のバス停で松岡行のバスを待っていると、世話係の学生が松岡經由永平寺行の特注バスを契約したと言ってくる。運転手さん一人と車一台が丁度この時間あいていたというのである。大喜びで路線バスを観光バスに急転用してもらって乗り込むこととなる。牧歌的なるバス会社（京福電鉄）である、勤務時間がどうか管理がどうか厳しい規定を持ち出すところでは、こういう具合には参らないはずである。

丸岡から松岡へ直進、丸岡の町並みを通り抜けると野中の一本道、北陸自動車道の下をくぐり抜けてしばらく行くと大きな橋にかかる。九頭龍川ですと運転手さん、松岡は永平寺に連なる山地と九頭龍川にはさまれた谷あいに広がる町である。芭蕉来往当時は越前藩の支藩として松平昌勝五万石天龍寺も藩主松平家の菩提寺として権威ある寺であったようである。享保年間本藩に合併して松岡館を廃したので、現在では城下町の悌とてないし、天龍寺も福井大地震で全部倒壊したそうで、現在は鉄筋コンクリートの今様寺

院に変身していて、禅寺という面影はなくなっている。参道の右側の空地に筆塚と芭蕉塚（右側面に維普天保甲辰初冬新建之とある）などが並んでおり、本堂前の庭前に新しい芭蕉翁像が建立されており、物書ての句碑もある。芭蕉翁顕彰の商魂のたくましさを感じられるが、松岡町の観光対策であろうか。

天龍寺前からまたバスに乗って一路永平寺に向う、『おくのほそ道』には『五十丁山に入りて』とあるが、この五十丁がどこからかは論のあるところ、バスは九頭龍川沿いに半里ばかりで東古市、そこから京福電鉄永平寺線沿いに山の中に入っていく、一里半ばかりで永平寺門前である。土産物屋を主とする門前町を通って永平寺参拝。大勢の觀光目的の参拝者と一緒に通用門から受付へ、青坊主の若い僧侶に案内されてゾロゾロと寺内を一巡する。その僧の説明では、山門が一番古い建造物で、寛延二年建立という。壮大な伽藍であるが、芭蕉来往当時の建造物は全く存在しないようである。当時の寺院規模もよく判らないけれど、修行の場として大差ないことであろうから、この山中にかくも簡朴にして荘大な伽藍を拝して、芭蕉にはそれなりの感慨があつたのではなからうか。それにしても芭蕉に関与した俳蹟はないものかとキョロキョロするけれど、全く見当らない。永平寺のパンフレットを買い求めて見ると、山口誓子・高浜虚子などの句碑はあるようであるが、芭蕉の

臭いのあるものは皆無である。一巡後たまたま吉祥閣の出口あたりに出会った黄衣の僧（数名の若い弟子を従えており、でっぷりと色艶のよい満面笑顔の僧侶で、相当高位の人であったのではないか）に、ここには芭蕉来訪当時の建物は残っていないのですかと尋ねてみた。七十才ばかりのその僧は、芭蕉という人が昔この永平寺を訪れたということは何かで聞いたことはあるけれど（芭蕉の『おくのほそ道』のことは十二分に御承知の上での言葉と思った。）ここは修行の場ですから誰がここに参詣したかということとはあまり問題にならない、修行の場だから、人間が生活しているのだから、十分注意しても火が出ることもあって、今まで七回焼失している、だから古い建物は残っていないという答えであった。芭蕉様の痕跡皆無であること納得、きれいさっぱりなのである。

民宿山口荘で最後の夜を過ごす、永平寺の宿坊に泊まることは何となく皆敬遠したのである。

七

九月十一日（水曜）、快晴。

芭蕉は、永平寺に参拝するに、『五十丁山に入りて、永平寺を礼す』と記す。この『礼す』という表現は、『おくのほそ道』では特異な表現と言えるのではなからうか。芭蕉はこの旅で数多くの神社仏閣に参詣している、その表現を室の八島以降をひろってみよう。

- ① 室の八島に詣す
 - ② 御山（日光東照宮）に詣拝す
 - ③ それより八幡宮に（金丸八幡宮那須野神社）詣
 - ④ そこに招かれて、行者堂（修験光明寺内）を拝す
 - ⑤ 薬師堂・天神の御社など拝て、その日は暮れぬ
 - ⑥ 早朝、塩籠の明神に詣
 - ⑦ 十一日、瑞巖寺に詣
 - ⑧ 岸をめくり、岩を這て、仏閣を拝し、佳景寂寛として心澄み行のみおぼゆ
 - ⑨ 五日、権現（羽黒権現）に詣
 - ⑩ 此所太田の神社に詣
 - ⑪ 五十丁山に入て、永平寺を礼す
 - ⑫ あるじに酒すゝめられて、氣比の明神に夜参す
 - ⑬ 六月六日になれば、伊勢の遷宮おかまんと
- 右のごとく十三例を見出すが、⑬例を除いては全て漢字表記である。その漢字表記も、『夜』という特定の時間を示す語を伴う『夜参』という語表記以外は、『詣』『拝』という二語と、この二語の合成である『詣拝』とに限定される。永平寺における『礼』という表記は、全くの特殊例と言えるのである。
- この特殊例とも言える『礼す』という語の注釈は、今のところあまり見当たらないようである。現代語訳をしてみると、『永平寺に参詣した』（『詳考奥の細道』）『永平寺に参詣

する”(角川文庫本) “永平寺を礼拝した”(講談社学術文庫本)
“永平寺にお参りする”(講談社文庫本) など、全く同巧異
曲であり、“詣” “拝” “詣拝” の現代語訳である。“お参り
する”とか“参詣する”とかの相違を意識した現代語訳は
見当たらないようである。現在における神社仏閣への参詣と
いう行為の表記としては、このような現代語訳しかないの
でもあろうが、芭蕉がここでわざわざ“礼す”と表記して
いることの意味については、十二分に検討しておく必要が
あるのではないであろうか。

“詣”の字は、我が国の慣用として“ゲイす”と音読す
る場合と、“まうず”と訓読する場合とがあり、『おくのほ
そ道』ではそれが両方とも用いられているのである。そし
てその音読と訓読とで意味上の相違があるかという点、注
解でも現代語訳でも意識的に区別していないのが実態であ
る。“詣”に送り仮名している室の八島の条について、曾
良本は“詣ス”とあり、音読符号としてよさそうであるが、
意味上に他の“詣”とのみ表記して“まうず”と訓読され
ている例と相違はないとしてよいようである。“詣”の字
は、「説文」に“詣、候至也、从言音声。”とあつて、そ
の「段注」には“候至者、節候所至也、致下云。送詣也、
凡謹畏精微、深造以道而至曰詣。”と注する。“謹畏精
微”にして“以道而至”という限定を付してではあるが、
“至”の意に帰着する字が“詣”なのである。

“拝”の字も、“ハイす”と音読する場合と、“をがむ”
と訓読する場合とがあり、『おくのほそ道』では音読する
形で用いられているようである。“拝”の字も『説文』に
よれば“擗、首至手也、从手擗、擗、揚雄説、擗从
兩手下。”とあり、「段注」には“拝之名、生於空首故
許言首至手、周礼之空首、他経謂之拜手。”と見え
る。『大漢和辞典』の解は“少し上体をまげ、胸前にくみ
あはせた手まで首を下げる”という、「説文」の注解を説
いたもの、形態として頭を深く垂れることを指している。
敬する対象に対して、形態的に頭を下げることを言うので
ある。

漢字として“候至”を意味する“詣”と、“首至手”
を意味する“拝”とは、我国で神社仏閣に参詣するを表現
する語として利用する時、音読するのは別として訓読する
には“まうず”と“をがむ”とするのが一般である。“ま
うず”は『倭訓栞』に“催馬楽にみゆ神代紀に向又詣をよ
めり参出の義なり俗に神社の御前にのみいへと古今集に躬
恒かまうできたるにと見えたり”とあり、要は“(まいず
(参出)の変化したもの) 貴所へ行く、至るの意の謙讓語。”
〔日本国語大辞典〕というのであり、“をがむ”は『倭訓栞』
に“神代記に拝をよめり私記に身体を折屈むの義といへり
推古紀の歌にをろがみともよめり—中略—西土にて手を地
まで下るを拝といひ首を手まで下くるを拜手といひ肩を地

まで下るを稽首といひ云々”とあり、要は“貴人の前で身を折り曲げて礼をする。拝礼する。”（『日本国語大辞典』の意であるから、極めて適切な訓みを適用したと言えるのであるけれど、実際に用いられた場における軽重感はどうなるのであろうか。

『おくのほそ道』における用法を検討すると、室の八島の“詣す”にしても、黒羽の金丸八幡・塩釜神社・瑞巖寺・羽黒権現・太田神社などの“詣”にしても、その場に参詣のため意図的に足を運んだという気持ちが含まれているのに対し、光明寺内の行者堂・仙台の薬師堂や天神、立石寺の仏閣などの“拝”は、行きがかりでその場に至り手を合せて礼拝したという気持ちと思われ、“拝”の方が形態的には丁重な姿を示しているも、『おくのほそ道』における軽重感で申せば“詣”の方がいくらか重いと見えようか。意図的にその聖なる場に赴いたという行為が、そうした表現意図を感じさせるのである。

『おくのほそ道』の結びで伊勢遷宮の神事拝観に赴くのを、仮名で“おかまん”と表記したのは、ここまでの“拝”という表記とは別趣であることを示そうとしたのでもあろうか。今まで、“詣”で表したと同じ行為である遷宮拝観なのであるが、それとも別趣であると感じたのでもあろうか。伊勢神宮に対する日本人としての特別の思い入れを漢字表記では示したくなかったのでもあろうか。少くも結果

的にはそんなことを考えてもよい表記になっているのである。一方日光の東照宮における“詣拝”は、漢字そのものの“詣”と“拝”との両義を含ませると、東照宮に意図的に立ち寄り丁重に拝礼したということになり、一語ずつ別に用いるよりは重い表現法と言えるであろう。この用字法について、芭蕉自身の意識の在り様をこれ以上踏み込んで論ずる材料はないけれど、江戸幕藩体制創設者たる徳川家康をお祭りしてある東照宮に対する芭蕉の敬慕の念を表する用字法と推察してよいのではないかと思うことである。

ともあれ『おくのほそ道』においては、一般に社寺参詣の行為を“詣”もしくは“拝”という用字で表記しているのであるが、その中で“礼す”と表記している永平寺の条は極めて特徴的と言わなくてはならない。“礼”の字は、『説文』に“禮、履也、所以事神致福也、从豊、豊亦声。”とある、「段注」に“見礼記祭義、周易序卦伝、履、足所依也、引伸之凡所依皆曰履、此仮借之法、履履也、礼、履也、履同而義不同。”と見える。礼は履であり、履は足の依るところ、依るとはびつたりと依りつくこととて、靴が足にびつたりと合うような様子を言い、礼というのは対象物になれ親しむ意を含むであろう。神に事えて福を致すゆえんというのは、そのあたりの意を示すのでもあろうか。要は神仏を敬して“礼”し、そこに俗な意味でなく福を期待するという極めて人間的感情が存在する字と

して「礼」はあるようである。

芭蕉には参禅の経験がある、その経験は常陸国鹿島の根元寺住職であった参禅の師仏頂和尚を尋ねて『鹿島紀行』の旅を実現し、『おくのほそ道』の旅でも黒羽で仏頂和尚山居の跡を尋ねて雲巖寺に杖を曳いているのである。「ある時は仏籬祖室のとほそにいらむとせしも云々」という有名な『幻住庵の記』の記述を残すほどの人生経験であった参禅のことは、芭蕉の心に深い影響を与えずにはいかなかったはずである、芭蕉俳諧の禅臭についてはしばしば論ぜられるところなのである。そして道元禅師は日本における禅の大宗、その道元禅師の開創になる永平寺に「詣」つて「拝」した芭蕉の心は、今までの『おくのほそ道』の旅で「詣」し「拝」した神社仏閣に対するのとは全く別趣の感動に包み込まれていたのであるであろうか。その心を表すものとして、四書五経の一つ『礼記』などの記述によって十分に体得していたに違いない「礼」という字を使用するに至ったのではないであろうか。道元禅師に対する親近感が、「礼」の字を使用せしめたと考えたいのである。その親近感には、敬し崇める念が強いことは言うまでもないことである。

永平寺は、元禄の昔も今も変わらず、芭蕉がどのような想いを抱いて参詣したかなどとは関係なく、深巖にしてこの場に存在し続けるのである。道を求める人たちの修行の場

として、そこに確かにあるのである。そこには芭蕉が三百年前に「礼」した痕跡は一つとして残されていないし、残そうという意志として永平寺にはなかったのである。平成三年の文教の娘子団も、青刺りの青年僧の凜々しさに感動しながら、森巖な山地から去ることである。門前町の雑踏の中で、里心付いて福井市へ、心は一路故郷広島である。平成三年の『おくのほそ道』行脚に同行した娘子団は次のようである、岩瀬あゆみ、小野由貴、川本知恵、久田見泰与、合田有希、坂田良恵、下村千和、土井真子、藤森菜美子、政野菊枝、松永恵子、三刀屋亜紀、森富美代、矢野恵、山崎晴美、山本清美、佐藤麗誇。くりから峠を始めとしてよく歩いた旅でした。